

平成 21年 5月 28日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17530479
 研究課題名（和文） 学校と家庭の連携にもとづく子どもの社会性育成を目的とした心理教育プログラムの効果
 研究課題名（英文） Effects of a psycho-educational program to enhance children's social and emotional competence through the cooperation of school and family
 研究代表者
 小泉 令三 (KOIZUMI REIZO)
 福岡教育大学・教育学部・教授
 研究者番号：90195644

研究成果の概要：

小中学生の問題行動の予防と好ましい社会性育成のために、社会性と情動の学習 (Social and Emotional Learning) のモデルとなる試行プログラムを作成し、小中学校の教育に導入してその効果を検討した。その結果、教科の学習等や学校行事と組み合わせて実施し、保護者との計画的な連携・協力や保護者による評価を取り入れることによって、社会性に関するいくつか側面で子どもの自己評価や教師による評価が向上することが明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	900,000	0	900,000
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,000,000	420,000	3,420,000

研究分野：

科研費の分科・細目：社会科学・心理学・教育心理学

キーワード：社会性、情動、心理教育プログラム、児童・生徒、学校、家庭

1. 研究開始当初の背景

学校が抱える教育問題として、年間30日以上欠席の不登校児童・生徒については大きな改善が見られず、またいじめ事件や、授業が成立しない学級・授業崩壊が続いている。さらに研究開始前年の2004年6月には、小学6年の女兒が同級生に切られて死亡するという我が国において前代未聞の事件まで発生した。万引き、暴力、シンナー・違法薬物乱用、性非行なども依然として大きな課題である。

これらの問題への対応として、予防的な取組の必要性が指摘されてきたが、単に問題行

動ごとの予防的な取組（講話や視聴覚教材での学習など）だけでは大きな成果につながらないことが米国などで指摘されている。諸問題の根底には、子どもの社会性すなわち対人関係能力の低下があると考えられる。そこで、子どもの好ましい社会性を育成するための具体的な方策を検討する必要があると考えた。

2. 研究の目的

問題行動を予防し、さらに子どもの好ましい社会性を育成するために、心理学の知見にもとづく教育プログラム（以下、心理教育プ

プログラムという)を開発し、学校教育に導入してその効果を検討することを目的とした。その際に、教育的効果を確かなものとするために、生態学的アプローチの視点から、学校と家庭の連携を重視した形で長期の実践を行い、事例研究および実験研究(実験群と統制群の比較)により、効果検証を行うこととした。

3. 研究の方法

試行プログラムの開発を行いつつ、まず小学校への導入を図り、さらに中学校への導入を行った。

(1) 学習プログラムの開発

①内容

子どもの社会性育成のための心理教育プログラムとして、社会性と情動の学習(Social and Emotional Learning: 以下 SEL)にもとづく試行プログラムを作成した。

SELは「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした、対人関係に関するスキル、態度、価値観を身につける学習」であり、ねらいとする能力は大きく5つの基礎的な社会的能力と、3つの応用的な社会的能力に分けられている。前者は自己への気づき、他者への気づき、自己のコントロール、対人関係、責任ある意思決定であり、後者は生活上の問題防止のスキル、人生の重要事態に対処する能力、そして積極的・貢献的な奉仕活動である。

②手続き

SELはもともと、米国で開発・実施されている子どもの社会性育成のための数多くの心理教育プログラムの総称である。本研究ではわが国での普及をねらいとして、モデルとなる試行プログラムを提示することとした。そのため既存の種々の学習プログラムから、SELの学習内容としてふさわしい授業案を適宜、選択・修正し、また必要な場合には独自に作成した授業案を追加して、小学校用と中学校用の試行プログラムを作成した。さらに導入・実践しながら適宜、改良を加えた。

(2) 小学校での学習プログラム導入と実践

①参加者

公立小学校6校(実験群2校、実践なしの統制群4校)が参加した。

②実施形態の概要

以下の4通りであり、試験的導入は事例研究法を用い、実践の場合は実験群・統制群の比較による実験法によって効果の検討を行った。

a. 特定学年でのSEL授業の試験的導入

b. 全学年でのSEL授業の実践

c. SEL授業と他教科(教科、道徳、特別活動など)を関連づけた大単元構成による試験的導入と実践

d. ボランティア学習とSEL授業を関連づけた試験的導入と実践

小学校に関する以下の報告は、これらの中で実施期間が1番長いcを中心に行う。

③手続き

実験群で、第4学年途中から第5学年途中までの1年間にわたる実践を行った。その手続きの概略は図1の通りである。

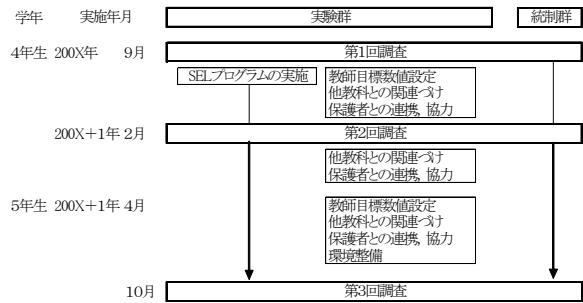


図1 実施の流れ

SEL授業と他教科との関連づけは、第4学年で2単元、第5学年で2単元の計4単元実施した。

保護者との連携・協力は、SEL授業参観と懇談会を実施し、また学級通信でSEL授業の様子や感想の共有を行った。なお、「a. 特定学年でのSEL授業の試験的導入」では、児童の発達段階に合わせて、SEL授業後に学校生活での日々の行動を児童に自己評価させ、週末に保護者に確認とコメントの記入を依頼するような方法も用いた。

④調査内容

社会性に関する児童の自己評定と、教師による評定を用いた。

(3) 中学校での学習プログラム導入と実践

①参加者

公立中学校2校が実践校として参加した。

②実施形態の概要

以下のとおりであり、どちらも事例研究法による検討を行った。

a. 特定学年での学校行事とSEL授業を関連づけた試験的導入

b. 全学年での学校行事とSEL授業を関連づけた実践

中学校に関する以下の報告は、これらの中で実施期間が1番長いbを中心に行う。

③手続き

1つの実践校で、1~3年の全学年で2年間にわたる実践を行った。その手続きの概略は表1の通りである。

SEL授業は、3年生が学校行事でリーダーとなるための学習と位置づけ、社会的スキルトレーニングを中心に9回の授業を学年または学級単位で実施した。例えば、互いに協力することの大切さに気づかせる、下級生の話

表1 SEL授業と学校行事の関係

学年	フォロワーとしての体験	リーダーとしての体験とその準備
1年	体育会(5) 合唱コンクール(10)	
2年	体育会(5) 合唱コンクール(10)	
3年		S EL (社会的スキルトレーニング) (1~3) 体育会(5) 合唱コンクール(10)

()内は実施月を表す

を聴く、下級生に説明するといった場面想定しての学習内容である。

保護者との連携・協力は、日常的な学級通信や行事の参観に加え、学校行事への取組を通して家庭で生徒の成長がどの程度見られるかを尋ねる質問紙を用いた。

④調査内容

社会性に関する生徒の自己評定と保護者による評定を用いた。

4. 研究成果

(1) 学習プログラムの開発

SEL 授業のための1つのモデルとして、小1~中3の各学年で10回前後の授業ができるように試行プログラムを作成した。既存の種々の学習プログラムを参考にしたが、実施に際しては子どもの実態と学習のねらいに合わせて、授業者が適宜、修正を加えた。

今後、子どもの社会性を育む予防・開発的取組の進展には、さらに検討と改良が望まれる。

(2) 小学校での学習プログラム導入と実践

実験群・統制群となった学校で、最初の時点(200X年9月)からの測定値の変化に注目するために、第2回調査から第1回調査、第3回調査から第1回調査を引いた数値(得点変化値)を、分析に用いた。

子どもの自己評定では、他者への気づきについて、まず統制群は得点の低下が見られた。これは、調査を繰り返すことによって、その調査項目に関する判断基準が明確になり、より厳しい自己評価をするためと考えられる。

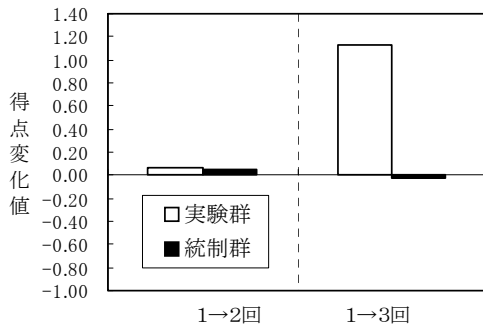


図2 SEL 教師評定における応用的な社会的能力の得点変化値

一方実験群は得点変化が見られず、統制群との比較において、試行プログラムの効果が見られた。

教師評定については、応用的な社会的能力の中の人生の重要事態に対処する能力と、積極的・貢献的な奉仕活動、そして応用的な社会的能力の合計点(図2)、さらに総合得点(基礎的な社会的能力+応用的な社会的能力)で、実施群の得点の上昇が見られた。統制群にはそうした変化は見られなかった

(3) 中学校での学習プログラム導入と実践

生徒のSEL自己評定について、特徴的な結果が得られた。実践の中心となる3年生に注目すると、3年生の第1回調査結果(2年時5月)にもとづいて、自己評定の高群・中群・低群の3つの群を設定した。図3は、その3群の総合得点(基礎的な社会的能力+応用的な社会的能力)の約1年半にわたる変化を示したものである。高群には統計的に有意な変化は見られなかったが、低群・中群は有意に上昇しており、特に低群での得点上昇が著しかった。

調査時期のX年5月~7月の間に2年時体育会、X年9月~10月の間に2年時合唱コンクール、X年10月~X+1年4月の間にSEL授業、そしてX+1年4月~10月の間に3年時体育会と合唱コンクールを体験している。リーダーの体験だけでなく、フォロワーの体験も含めて、低・中群の生徒は自己評定点が上昇しており、教育効果が大きいことが推測できた。

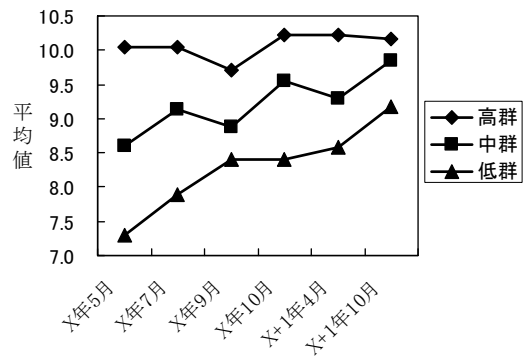


図3 生徒のSEL自己評定における総合得点の変化

保護者による評定は、合唱コンクール(X年10月)と体育会(X+1年5月)直後に実施した。まずアンケート調査の回答率が高く(学年単位で76.1~97.2%)、また例えば学校行事で子どもの成長を実感できた保護者がどの学年でも8割前後(体育会の3年生は97%:表2)に達していた。保護者の学校行事への関心が高く、またそうした取組による生徒の成長を保護者も認める傾向が高いことが明らかになった。

表2 体育会の保護者評価：「子どもの成長の実感があつたか」(%)への回答

	かなり感 じた	まあ感じ た	あまり感 じられな かった	ほとんど 感じられ なかった	無回答
1年	45.3	44.2	8.1	1.2	1.2
2年	36.2	52.2	8.7	2.9	0.0
3年	71.8	25.4	2.8	0.0	0.0

(4) 今後の課題

学習プログラムについては、育成を目指す社会的能力を確実に身につけられるように、独自に作成した学習指導案の追加を含めて改善を図る必要がある。

小学校での実践と効果測定については、学校と保護者の連携をさらに深めるための方策の検討、そして中学校での実践と効果測定については、実験法による効果検討が必要であり、さらに小中学校の連携によるより長期の実践と効果測定も今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ①宮原紀子、小泉令三、中学校の学校行事と関連づけた社会性と対人関係能力の向上—社会性と情動の学習 (SEL) プログラムの活用による試行的実践—、教育実践研究 (福岡教育大学教育学部附属教育実践センター)、第17号、143-150、2009、査読無
- ②小泉令三、学校行事における家庭・保護者との連携に関する保護者評価の工夫事例、教育実践研究 (福岡教育大学教育学部附属教育実践センター)、第17号、137-142、2009、査読無
- ③堤さゆり、小泉令三、効果的なボランティア学習のための単元構成の工夫事例—心理教育プログラム SEL の活用を通して—、教育実践研究 (福岡教育大学教育学部附属教育実践センター)、第16号、137-144、2008、査読無
- ④田中展史、小泉令三、社会性と情動の学習 (SEL) プログラムの強化・一般化に関する試行的実践—教科等との関連づけ、目標の個別化、保護者との連記を通して—、福岡教育大学心理教育相談研究、第11巻、73-81、2007、査読無
- ⑤香川雅博、小泉令三、小学生における社会性と情動の学習 (SEL) プログラムの効果、福岡教育大学紀要、第56号第4分冊、63-71、2007、査読無
- ⑥香川雅博、小泉令三、小学校中学年における社会性と情動の学習 (SEL) プログラムの試行、福岡教育大学紀要、第55号第4分冊、147-156、2006、査読無

[学会発表] (計7件)

- ①田中展史、小泉令三、児童を対象とした「社会性と情動の学習」プログラムの縦断的検討、日本教育心理学会第50回総会、2008年10月12日、東京学芸大学
- ②堤さゆり、小泉令三、小学生版自己有能感尺度作成の試み、日本教育心理学会第50回総会、2008年10月12日、東京学芸大学
- ③KOIZUMI REIZO、Effects of Social and Emotional Learning program on junior high school students、30th International School Psychology Association Colloquium 2009、2008年7月9日、Utrecht、Netherlands
- ④田中展史、小泉令三、小学生における社会性と情動の学習プログラムの効果(3)—低学年対象の SEL (Social and Emotional Learning) の実践—、日本教育心理学会第49回総会、2007年9月16日、文教大学越谷キャンパス
- ⑤KOIZUMI REIZO、TANAKA NOBUCHIKA、Individual differences in the effects of Social and Emotional Learning program、29th International School Psychology Association Colloquium 2007、2007年7月25日、Tampere、Finland
- ⑥KOIZUMI REIZO、KAGAWA MASAHIRO、Effects of Social and Emotional Learning program for Japanese children、28th International School Psychology Association Colloquium 2006、Hangzhou、China.
- ⑦香川雅博、小泉令三、小学生における社会性と情動の学習プログラムの効果(2)—高学年対象の SEL (Social and Emotional Learning) の実施—、日本教育心理学会第48回総会、2006年9月17日、岡山大学

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小泉令三 (KOIZUMI REIZO)
福岡教育大学・教育学部・教授
研究者番号：90195644

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

研究協力者

香川 雅博 (KAGAWA MASAHIRO)
田中 展史 (TANAKA NOBUCHIKA)
堤 さゆり (TSUTSUMI SAYURI)
宮原 紀子 (MIYAHARA NORIKO)
福岡県公立小中学校・教諭